

第 32 回市民セミナー

SDG s へのアプローチ～水環境分野の戦略～

講演要旨集

2023 年 8 月

主催 公益社団法人 日本水環境学会

第 32 回市民セミナー

SDG s へのアプローチ～水環境分野の戦略～

目 次

水は社会を映す鏡である～SDGs における水と衛生へのアクセス改善を通じた水不平等問題の解決に向けて～…………… 1

東京大学 滝沢 智

若手専門家から見る水分野の未来～SDGs を上下水道の未来像を描く道具に～………… 2

国立保健医療科学院 浅田 安廣

海なし県の里山の町に育った研究者が森、川、海つながりについて考えた……………3

埼玉県環境科学国際センター 田中 仁志

水は社会を映す鏡である

～SDGs における水と衛生へのアクセス改善を通じた水不平等問題の解決に向けて～

東京大学大学院工学系研究科 都市工学専攻

滝沢 智

日本の水道は、高度成長期以降に全国に普及し、現在は国民の98%以上が水道を利用しています。日本が世界に誇れる水道には、低い漏水率や高度な水処理技術など、いろいろなことがあります。最も誇れるのは水の平等性です。同じ都市に住む人は、所得や社会的な地位に関係なく、いつでも水道を利用可能です。また、同じ料金表に従って水道料金を支払います。日本人には当たり前のことですが、世界の多くの都市では、この当たり前が実現できていません。反対に、社会経済の不平等の拡大とともに、水の不平等も拡大しています。

みなさんは、タンカーマフィアという言葉を知っていますか？今日、開発途上国の多くの都市では、十分な水が供給されないため水の奪い合いが生じています。水道事業者が供給できる水量は、都市の水需要のごく一部しか満たすことしかできず、社会的地位が高い人は24時間給水を受け、一方で、所得や社会階層が低い人々はわずかな時間や水量しか給水されず、水売りに高い料金を払って水を買っています。このような状況の中で、タンカーマフィアと呼ばれる人は、水道管から違法に水を抜き取って高値で住民に売ることによって、水の支配を拡大しています。

今後も、世界の多くの都市で人口増加とともに水需要が増大するため、水不足はさらに深刻になります。水の平等を実現するために、私たちが取り組むべき課題や、私たちにできることを考えてみましょう。

若手専門家から見る水分野の未来

～SDGsを上下水道の未来像を描く道具に～

国立保健医療科学院

浅田 安廣

持続可能な発展目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は、私たちが目指す未来像として、17の目標と、169のターゲットから成り立っており、そのうち多くが我々のフィールドである水分野にも関わっています。この水分野では、将来を担う若手の皆様が共に活動を行い、分野・職種間の交流を促進し、水問題に関する様々な情報交換を行うプラットフォームであるJapan-YWPという組織があり、若手中心とした様々な活動を行っています。このJapan-YWPは、2010年3月5日に設立したInternational Water Association（IWA）日本国内委員会（IWAの日本支部）の下部組織であり、水に関わる様々な若手を繋ぐ大切な組織となっています。そして、その活動の一環として着目したのが、SDGsとなります。

初めは、SDGsを学ぶ勉強会として、ワークショップを行ってきました。そして、回数を経て、議論を重ねるごとにとある疑問に辿り着きました。それは、「SDGsの目標は、国連で定められたままでは扱いづらい」ということです。さらに、国際的レベルのSDGsを学ぶだけでなく、即した具体的な使い方を掘り下げる必要があるのではないかとすることに辿り着きました。そこで、Japan-YWPのメンバーで有志で設立したのが、「水×SDGs」ワーキンググループでした。

Japan-YWPメンバーの中には、上下水道分野に関わる人が多いこともあり、テーマとしては「上下水道の未来をSDGsで描く」となりました。国連で定められたSDGsを日本の上下水道で参考にするために議論を重ねた結果、抽象的な17の目標（ゴール）ではなく、より具体的な行動目標となっている169のターゲットを見ていく必要があることで意見がまとまり、これらターゲットを「使えるようにする」ために、「国内への落とし込み」、「セクターへの落とし込み」、「行動への落とし込み」の3段階に分けて「落とし込み」をする必要があると考えました。これらをベースに、Japan-YWP「水×SDGs」ワーキンググループ主催のワークショップの回数を重ねることで、SDGs活用に向けた道具立ての具体的な方法（「水×SDGs」メソッド）を提案しました。

ここでは、まずJapan-YWPの活動について紹介します。次に、「水×SDGs」ワーキンググループ設立に向けた活動の紹介となります。水分野の若手がSDGsに対して、どのように考えているのかを紹介します。最後に、「水×SDGs」ワーキンググループの活動として、「上下水道の未来を描く道具としてSDGsを使う」という課題に対する成果について紹介します。

海なし県の里山の町に育った研究者が森、川、海のつながりについて考えた

埼玉県環境科学国際センター

田中 仁志

本発表は持続可能な開発目標（SDGs）の目標6、14や15のターゲットの内、多様性に該当するものと考えております。発表者が育った埼玉県比企地域はいわゆる里山地域に当たり、「天水」と呼ばれる雨水を水源とするため池が数多く作られていて、その下流に水田が広がる景色があちこちで見ることができます。現在では国の絶滅危惧IA類に分類されているミヤコタナゴ(*Tanakia tanago*)もこれらのため池の中から生存が確認され、人為的繁殖法が確立されたことにより、現在は保護施設で保存されている。令和4年6月には「比企丘陵の天水を利用した谷津沼農業システム」として日本農業遺産に認定されました(滑川町HP、2023)。「森は海の恋人」という考え方はよく知られるところですが、ならば森に囲まれているため池であれば、森と水質の直接的な関係が明らかになるのではないかと着想し、ため池調査を実施しました。その際、池水が抜かれたため池の底に刺さった状態で淡水二枚貝ドブガイの殻（殻長18cm）を見つけたときの感動は、今なお忘れられません。そんな突然の出会いが、現在も細々と続けているイシガイ科二枚貝の研究に繋がっています。なお、学名の由来となった田中博士と小生とは全く関係がございません。

埼玉県は、長野県や奈良県と並んで数少ない海なし県です。しかし、川で海と繋がっていること海で起こっている環境問題、最近ではプラスチックごみ問題の解決に向け、陸と海をつなぐ川の役割を理解していただく必要があると考えています。さて、毎日放課後の遊び場は里山ならぬ里川でした。当時はそこには必ず友だちがいて寂しい思いはしませんでした。もちろん一人でも魚釣りをして時間を忘れて遊びました。今となっては放流したものなのか天然物なのか確かめることはできませんが、ウナギが釣れたことを自慢する上級生にうらやましく思ったことを覚えています。ニホンウナギについては、2018年度第27回市民セミナー「豊かな里海の創生～沿岸域と河川流域の関係～」でも取り上げられています。ニホンウナギは南の海で生まれ、海流に乗って日本にやって来て、それらの個体群の中には川を上る個体があります。川で育った親ウナギはまた南の海で産卵することになります。ニホンウナギは海と里山のつながりを示す川の生き物として、県が実施する環境学習教室において主に小学校や県民の皆さんへお話ししています。

本発表では、森、川、海のつながりについて、生き物と多様性の視点から考えてみたいと思います。